



CIF JAPAN

NEWSLETTER No.40

<http://cif-japan.papnet.jp/>
cifjapan08@gmail.com

Council of International Fellowship Japan

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン 理事長 坂本 正路

編集人 坂岡 隆司 発行日 2019 年 2 月 1 日

事務局 〒607-8216

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館

TEL 075-574-2800 Fax 075-574-0025

第3回 IPEP に向けての準備を

理事長 坂本 正路

2018年はCIF ジャパンにとって大きな事業もなく平穏に過ぎたように思います。しかし、2020年には、出来ればIPEP (International Professional Exchange Program) の第3回を開催したく思っております。この実現のためには、事業資金、計画立案、事業分担など多くの課題を抱えております。特に、過去2回にわたって京都を中心に行ったため、前理事長竹内さんや副理事長の坂岡さんに過大の負担をしていただき、何とか実施できたのが実情です。そのために、会員の皆様には是非とも事業実施のためにご協力をお願いしたいのです。研修前半の講義研修は同志社大学の木原先生にお願いするようになりますが、後半の現場研修はより広い実習場所を提供できればと考えております。前回には別府栄光園の江口さんが研修生を受け入れてくださり、大変有意義な実習を体験していただきました。他に類を見ないユニークなCIFの

研修事業の実現にむけて、具体的な協力のみならず、陰からの理解と協力も欠かせません。会員全員のご理解のもと、準備を進めてまいりたいと思っております。



第2回IPEPの参加者たちと(同志社大学2017/10/9)

世界を知り学んだCIPプログラム 記憶をたどりながら

Itsuko · F · Nandi 藤本 幸子
(1973Columbus)

世界は激変し、人々の生活様式も行動パターンも様変わりしたこの世界で、最も繁栄しているのが人間社会であろうか。この人間のなせる業で、幸福な社会が、不幸な社会が、といかようにでも、作りだされるのである。人々の生活が、豊かで、平和な日常が、継続するよう援助する役割を担った、社会福祉の仕事、しかし世界は、広大かつ種々雑多、すべてを知り、理解することは、不可能である。こんな折私に、チャンス到来。それが、CIP プログラムへの参加であった。当時(1970年代)世界各国の社会福祉従事者への研修プログラムで、地図上の5大陸から、年齢、職種など基本的な参加資格はあったものの、とにかく世界60~70か国、300~400人近くの参加者が、ニューヨーク国連本部に参集、そのあと4か月~1年の研修のため、それぞれの州立大学のある受け入れ先へ移動し、研修後、再び、ホワイトハウス見学で締めくくられたのである。私が参加したコロンバスでは、大学での講義と、討論そうして、参加者が、自国の現状や問題点など、紹介し、それを踏まえて再び討論するのであった。それから、各々のフィールドで、研修が、始まった。私に特訓するスーパーバイザーに、フーフーいながらも日々事故もなく無事過ごすことができたが、24時間、すべてが、激務で、生々しく、かつ新鮮で、私の4か月は、その10倍くらいに感じられたのであった。フィールドを去る最終日の達成感、私への、最高の贈り物であった。処で、講義が、なされていた時、各国の参加者の発表を聞きながら国により、制度や、運用の仕方も様々、当時若い私には【どうしてなの】の疑問だらけ、そうして得た結果そこには、各々の文化、歴史、地政学的な要素などが、複雑に絡み合っていることを理解したのであった。また、こうしたことに配慮しながら、社会福祉の実践をしなくてはいけないことをきずかされたのであった。研修終了後も世界に至る所に別れていった新しい仲間を思い、いささ

インド訪問記

三宅 浩
(2004 Kalamazoo)

か高揚した気持ちを抱えて帰国した私がいた。私が、感じていた当時の日本は、社会福祉事業の改革、発展期ではなかったかと。専門職としての資格や、社会福祉事業への意識改革など盛んに議論されていたころであった。行政機関や施設には、慈善事業的な考え方もありまたソーシャルワーカーという言葉も定着しておらず色々日本国内と、私の気持ちとの擦に、興奮気味の私の気持ちも、しばみそうになりかけたが、若い情熱は、たくましく、貴重に思える。社会のために、人々のために、日本の福祉の発展のためにと、日夜仲間たちと共に、がむしゃらな時を過ごしていた、その当時には、メールなんて便利なものもなく、雑音の多い国際電話、2~3週間費やす航空書簡などのやり取りで、世界の仲間と繋がっていた。また手取り早くは、東京の必要とする国の大使館に資料や、情報提供の依頼をしたり、と、とにかく一生懸命の若いソーシャルワーカーの自分が、そこにいたのであった。世界に散らばった同期の仲間たちからの応援と、仲間意識に支えられ、日本のなか

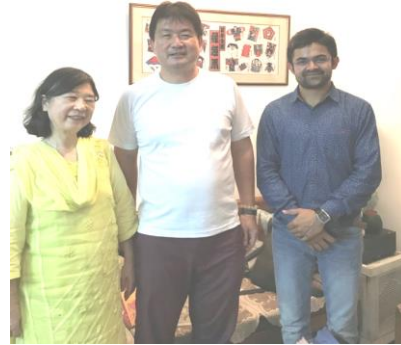
でも、頑張れたのかもしれない。当時私が、よく反問した言葉に、“日本は、こうするけど、でもほかの国では、如何するのかな”と、これは多分視野を広げ常に物事を分析、検討することなど CIP プログラム参加経験により身につけ始めたのではないかと、思えた。

社会事業の現場から離れ、別の世界に、移ってしまったが、今もなお私の、日々の行動に CIP プログラムで得た経験が、生かされているように感じるのである。
【あなたに与えられたものは、次に必要としている人の手に、差し上げなさい】と話されたオーレンドルフ博士の精神を、私の心にとどめ、この人生が、全うされれば、幸せに思う。

筆者が教えていた盲学校日本語クラスを卒業した生徒たちと。



藤本さん宅にて。右は藤本さんのデリー大学時代の学生（教え子）



約 20 年ぶりに訪れたインドの様子は私の知っているインドとは大きく変貌していました。かの国の経済発展はニュース等である程度は理解していたものの、目にした街並みや人々の生

活、交通機関の整備等は想像を超えるものでした。

町にはインド国産車はあまり見かけなくなり、私が乗ったタクシーはすべてが日本車。道行くほとんどの人の手にはスマートフォン。デリーの地下鉄はすべての駅のホームに転落防止柵が設置されていて京都の地下鉄に匹敵するくらい近代的なものでした。しかし、クラクションを鳴らしながら無秩序（日本人から見てもですが）に交差点に突っ込む車。数多くの車の合間を縫って走るオートリクシャ。どんな小さな町に行ってもあふれる人々。これらは変わらないインドの風景でした。

私とインドとの出会いは、大学卒業後知的障がい者の入所施設に就職。その施設を運営する社会福祉法人を経営的にバックアップしていたお寺の住職から、『これから社会福祉をやろうとする若者は、欧米もいいがインドのような開発途上国から精神的なものを学んできなさい。』と言われ、デリーまでの往復航空券と 1,000 ドル（当時は 1 ドル 250 円）を渡され、同僚と二人インド 6 週間の旅に出たのが 1983 年夏でした。

その時の直属の上司だったのが竹内和利前理事長で、竹内氏はインドでの生活経験が豊富な方でしたので、インドの話しをよく聞かせてくださり、私が渡印する際も伊丹空港まで見送りに来てくださいました。私がインドに興味をもったのは、竹内氏とその住職との出会いが大きく影響しています。

その後個人的にも何度かインドを訪れ、26 歳の時には南インドカルナタカ州にある障がい者施設などで居候をしながら、数か月間インドを放浪する経験もさせていただきました。その時も竹内氏からたくさんのご支援をいただきました。

今回訪問した場所は、南インドカルナタカ州のバンガロール、マンガロール、そして首都デリーの 3 か所。バンガロールは今ではインド第 3 の都市に発展し、「イ

ンドのシリコンバレー」と呼ばれるほど近代的で多くの外国企業が進出してきています。一方、マンガロールは西海岸に沿った港町で、まだまだインドの田舎の風景を残したのんびりとできる町です。

訪問の目的は、今年度から当法人職員を順次研修でインドへ派遣するための研修施設の受け入れ依頼や現在のインドの情報集めです。ほとんどがインド初めての職員のため、少しでも多くの情報を集め、研修が安全かつスムーズに進むよう現地を視察してきました。

私が 30 数年前に竹内氏からインドの魅力やインド社会の不思議さなどたくさんのことを教えていただき、実際に現地に行く機会を得ることができ、すばらしい



St. Agnes Special Schoolにて

経験させてもらったことに今でも感謝しています。それをいつかは私の周りの若い人たちにも与えられればと、以前からその機会をうかがっていました。そして、数年前にCIFジャパンの総会が京都で開

かれた折、デリー在住のナンディ藤本さんにお会いし、お話しさせていただいたのをきっかけにその想いを実現しようと動き出しました。

研修を依頼した先は、マンガロールの Asha Niketan とマンガロールの St. Agnes Special School の2か所。Asha Niketan とはフランスで始まった知的障がい者と健常者が共同で生活を営む共同体社会“L'Arche”の一つのコミュニティーで、現在で37か国にまで広がり、国際ネットワークを形成しています。ここでは、施設内に宿泊させてもらい、日本の福祉施設に見られる支援される側と支援する側との関係でなく、共に地域の中で生きることを学んでほしいと思っています。

St. Agnes Special School は、知的障がい児が通う特別支援学校で、敷地内には卒業生が通う作業所も併設しています。また、卒業後障がいが高くどこにも行く当てのない人たちをシスターがお世話している日本でいうグループホームもあります。いずれも今から 32



年前に私がインド長期滞在中研修を受け入れていただいた施設です。今回は、当時のスタッフも健在で、非常に懐かしい再会となりました。今でも非常に貴重な

経験をさせていただいたと思っています。

現地の福祉施設での研修に入る前にインド社会の現状、社会保障等々インドについて知識を深める必要があると考え、藤本さんに研修に派遣する職員へのレクチャーをお願いするためにデリーを訪れました。マンガロールからデリーまで約 2,200km。飛行機で 2 時間 45 分の旅。インド大陸は広大です。藤本さんには 2 日間時間を割いていただき、ご自宅にお邪魔させていただいたり、デリーでの宿泊施設を紹介していただいたり、列車のチケットまでお願いし、とてもお世話になりました。

自然環境の厳しいインドで一人暮らしをされていると日常生活ではいろいろと大変なこともあるかと思いますが、インドや日本社会のことをお話ししている言葉には力がみなぎり、圧倒されそうなくらいの気迫が感じられました。お話の中で外から見る日本の現状を心配されておられ、日本に住む我々がどれだけ自分の国のことを考えているのかと反省させられました。藤本さんからは、『日本の若い人たちの役に立てるなら喜んで協力しましょう。』との言葉をいただきました。今回のご縁も CIF ジャパンのつながりと、竹内前理事長が導いてくださったものと感謝しております。次はいつインドへ行こうか。その時はまたどのようにあの国は変化しているのだろうかと思いをはせながら 2 週間のインド滞在を終えました。

戦争文化から平和文化へ

～ステイブン・リーパー講演から～

牧田稔

(1976 Cleveland)

2018年11月16日～17日に京都クリスチャンアカデミーで全国YMCA退職者会が開催され、私の終活の一つとして参加。今回でステイブン・リーパー氏の3回目の講演を直接聞くことができました。



ステイブンリーパー氏

当日「アメリカ人が伝えるヒロシマ」「ヒロシマ発恒久平和論」にサインをいただいた。

2009年神戸YMCAの午餐会で、(財)広島平和文化センター理事長(2007年～2013年)のステイブン・リーパー氏の「戦争文化から平和文化へ」というテーマの講演を、今回も身近に聴く

ことができた。穏やかで流暢な日本語での講演であったが、平和を創り出す情熱が、私たちに大きな感動と問いかけが与えられた講演であった。

YMCA 関係者にとって、彼の父デイン・リーパー氏の名を忘れてはなりません。

私は企業から YMCA の主事に転職した時の新人研修で、デイン・リーパー氏のことを初めて知ったように記憶している。

彼は、アメリカ YMCA から日本の学生 YMCA への協力主事として派遣され、YMCA 運動を指導していたが、北海道の集会後、仙台に行くため青函連絡船「洞爺丸」に乗船し、転覆事故にあったといえます。敗戦後の日本の青年たちに、各地の学生 YMCA や都市 YMCA で民主主義を教え、青年たちに生きる希望を与えていたと推測します。

1954年9月26日、青函連絡船「洞爺丸」の転覆事故で1155人が死亡したが、パニック状況にあった乗客を落ち着かせて救命胴衣の着用を手助けしていたのが、同乗していたリーパー氏とカナダから派遣されていたストーン宣教師だったといえます。

死亡者の多くは、救命胴衣を着けていましたが、リーパー氏と宣教師ストーン氏の遺体には胴衣がありませんでした。後に、救命胴衣をもらったという青年が現れました。自分の着けていた救命胴衣を日本人に手渡して死んだリーパーとストーンの愛の行為を作家三浦綾子は、「氷点」のなかでモデルとして登場させています。

さて、ご子息のステイブン・リーパー氏の講演に戻りますが、父が亡くなったのは33歳で、自分はその時6歳だったといえます。ウエストジョージア大学臨床心理学修士課程修了。1984年来日、当初日本での異文化コミュニケーションコンサルタントとして来日したが、その仕事はキャンセルされ、困っていた時に、友人が広島 YMCA に連れて行き、思いがけず YMCA の英語教師として奉職することになり、並行してコンサルタント・翻訳・通訳会社を設立。来日した

当初は、広島市民の痛みを知らなかったが、広島に住み、被爆体験の通訳や原爆関連の書籍の翻訳や「原爆の子」等の本を読み、初めて大きな痛みを受けたことから平和を見つめるようになったといえます。

「人間は人の痛みを無視できる」このことができるのは、戦争文化から習得してしまった悲しい人間の生き方ではないか。また、毎日2万数

千人が飢えている現実に関心をもたず、弱い者が死んでいくことは自然だと考えることは、戦争文化といえるのではないかと思います。

いまだに世界のトップリーダーが戦争文化に浸っているケースが多いことを認識しなければなりません。今日の世界で、競争原理でなく、協力原理を働かせなければ、戦争文化から平和文化への転換はあり得ないと主張します。

かつてインドではガンジー、アメリカではキング牧師が軍需産業都市といわれるアトランタで非暴力主義を説き、実践したが、今や両国とも核兵器をもち、他にも核兵器を使用する危険性を持った核保有国もある。こんな状況を認識して、核兵器使用は、絶対阻止しなければならないと情熱をこめて語り、日本は、アメリカに対して「平和文化」を説くことができる唯一の国だと思う。憲法9条、非核3原則、被爆国、戦後70年間直接戦争をしていないことから、「平和文化」の創造を強く世界に主張できると言います。

そして、広島平和文化センター理事長として、自ら被爆体験証言者とともに、アメリカの52都市の他、各地で「原爆展」を開催し、100回を超えるプレゼンテーションを行い、核兵器廃絶の運動を展開されています。

アメリカ人のリーパー氏は、軍事国家になってしまっているアメリカで、オバマ大統領の就任した時は、核兵器のない世界へチェンジする希望が与えられたと思ったが、現在の現実、戦争文化の真ただ中なので、平和文化とは何かを探り、世界に発信するモデルをつくりたいと、「平和文化村 (Peace Culture Village)」を広島で設立し、平和文化を創る運動を展開されておられます。

敗戦後の日本へ、学生 YMCA の主事としてきた父のデイン・リーパー氏の行為と願いが、現在、息子のステイブン・リーパー氏の働きに脈々と受け継がれていることに感動し、平和な世界の構築に参画しなければという想いを再確認した講演会であった。

CIP/CIF は、ナチス・ドイツを逃れたオーレンドルフ氏の平和への願いを心に留め、CIP参加者を通じて各国で努力していることに、リーパー氏の平和文化構築への運動と共通しているように思い寄稿しました。世界で戦争文化から平和文化が実現される日を願い、私もその想いに参画したいと思います。

思い出の CIP 写真

坂本 正路 (1971 Columbus)

私は1971年の CIP のコロンバスに参加いたしました。

この頃のCIPの様子は本号の1面にナンディいつ子さんの記事として掲載されていますので、私は写真で当時のプログラムの思い出を報告させていただきます。当時、開会式はニューヨークで行われ、その際国連本部を見学に訪れました。その時の写真をご覧ください。



最前列の右端が私です。最初、私はみんなの最後尾にいたのですがカメラマンが突然「反対側から撮りたい」と言って逆から撮ることにしたので一番前になったというわけです。

この年、日本から4名が参加しましたが、幸いオーレンドルフ会長と写真を撮ることが出来ましたが、この4人は今も各々の分野で活動しています。



左端筆者、中央オーレンドルフ博士

研修地のコロンバスで私のホストファミリーになってくださった方はコリンズさんというオハイオ州立大学の教授でしたが、たいへん気さくな方でした。最初の日には丁度第3子のエミーちゃんの2歳の誕生日で、楽しい時間を過ごしました。それ以来、コリンズ家との交流は続いています。エミーは今年丁度50歳です

が今年もクリスマスカードをいただきました。私の CIP 体験はその後の私の人生に大きな影響を与えてくれたことは言うまでもありません。



コリンズさん一家

CIF INTERNATIONAL の動き

CIF は、わたしたちの将来のあり方について検討をすすめています。

検討は、2017年の代表者会議(9月、ギリシャ)でCIF スイスのフィッシュバッハ会長が、「CIF の将来のあり方について検討しよう」と発議したことからはじまりました。出席者全員が賛成して「CIF 2028年委員会」が設置されたのです。委員長は発議者のエリザベート・フィッシュバッハさん、メンバーはエストニア、アメリカ、オランダ、台湾の会員、全部で5人。委員会の役割は「現状分析と会員間の協議をリードすること」で、世界のCIF 会員“全員参加”を目標に、まずはアンケート(12月)で課題を掘り起こし、代表者会議のワークショップ(2018年8月、オーストリア)で課題別討議、つづいてワーキンググループをふたつ立ち上げて(11月)、現在有志8名で「①コミュニケーション(CIF 各国間や外部へのPR)」と②「IPEP(国際研修)の型と質の検討」についてテーマをしぼった協議をおこなっています。ワーキンググループの有志は、アルゼンチン、エストニア、フィンランド、ドイツ、インド、イスラエル、スウェーデン、台湾からの8名でCIF 会員以外の分析の専門家も含まれているそうです。今後は、今年の代表者会議(2019年6月、フランス)でワーキンググループの協議結果報告と質疑、秋ごろ「CIF 2028年委員会」から行動計画が提案されることになっています。CIF の課題や協議内容、ワーキンググループの趣旨(要項)などはウェブサイトで公開されていますので、ぜひ、ご覧ください。

CIF 各国共通の課題のひとつは会員の高齢化です。この課題を克服するために、「IPEPに参加者を送りましょう。」という発言が代表者会議でなされています。CIF ジャパンでも、私たち会員が身近な友人・知人にCIF 国際研修を紹介し、研修参加を推進していきましょう。

(浅野記)

第33回 CIF 国際大会のご案内

今年は、世界遺産モン・サン・ミッシェルで有名なフランスのサン・マロで CIF の国際大会が開催されます。現在の CIF 会長ミレイユ・ブシェさんをはじめ、フランス CIF のメンバーが一丸となって準備を進めています。下記ウェブサイトからご登録いただけますのでふるってご参加くださいますようご案内いたします。
<http://cif-france.org/en/>

期間：2019年7月1日～5日（6月28日～7月1日 CIF 代表者会議）

開催地： フランス、サン・マロ

テーマ： *Market Economy and New Public Management in social fields* 「社会分野（社会福祉・社会開発分野）の市場経済と新しい公的運営」協議をとおして得られるインパクトや変化は、社会分野を専門領域とする私たちが仕事で直面する経済的な束縛（デメリット）や有益性（メリット）を提示してくれるでしょう。

プログラム： 基調講演、ワークショップ、施設訪問など、文化行事・観光など。

Column

Hiram Ruiz 氏(米国) との交流



左より梶村, Hiram, 坂本の各氏

CIF アメリカの会員 Hiram Ruiz 氏から中国旅行の帰りに日本に立ち寄るので、CIF ジャパンの関係者

と会いたいというメールが CIF ジャパンに届いた。何回かのメールの交換があり、10月1日に東京で CIF ジャパンの坂本理事長と梶村が会うことになった。あらかじめ、難民問題などを話し合いたいという希望が出されていたが、当方でそのことに詳しい対応することが困難であったため、特にテーマを絞らずに話しあうことになった。台風一過の晴天の下、新宿御苑近くの喫茶店で懇談した。年齢は中年後半前後とお見かけした。キューバ難民の出身で、アメリカ人として、国連で難民問題関係の仕事などをしていたといわれていた。国連職員として、アフリカのソマリアなどで難民

が抱える問題の対応に携わった時の話などを聞かせてもらった。このような出会いを通して各国の CIF 同士の結びつきが自然な形で強められていくと感じた。

(梶村記)

Peter Dimmer 氏との交流



左より梶村, Peter, 坂本の各氏

ドイツの CIF メンバー、ピーター・ディマーさんが来日されているということで、10月5日、坂本さん、梶村さんのお二人で、東京で面会（おもてなし、交流）していただき

ました。ピーターさんはこれまでも何度か来日。前回は17年の第2回 I P E P の初日でした。彼は、医療ソーシャルワーカーとして、かつて、シエラレオネにて5年間、ハンセン病と結核に関する活動に参加したことがあるとのこと。世界の CIF メンバーとこのような交流は、たとえ小さなものであってもとても貴重です。日本人のメンバーである皆様も、もし機会があったら、ぜひこうした交流をなさってください。

(坂岡記)

<2019年度総会予定>

ご案内は、詳細が決まり次第お送りします。日程、開催地のみ決定しています。いまからご予約ください。

日時：2019年**5月18日(土)** 午後1時30分
会場：京都市（からしだね館）

<< 2019年度会費納入ご協力のお願ひ >>

新年度の会費の納入をお願いいたします。また、過年度の会費が未納の会員各位には併せて納入をお願いいたします。

（年会費 3000 円） 寄付も歓迎します。

郵便振替口座 番号 00270-4-54121

加入者名 CIF ジャパン

銀行口座 三井住友銀行 八王子支店

(店番号 843) (普) 7815136

口座名義 CIF ジャパン 出納責任者 梶村慎吾

《編集後記》お蔭様で盛りだくさんの 40 号になりました。投稿して下さった皆様には特別感謝いたします。坂本理事長の思い出の写真、興味深かったです。次号より順次、皆様の思い出写真を掲載しますので奮ってお送りください。(TS)